

第1回市史講座ミニレポート：平成31年4月13日（土）

「縄文～弥生時代の景観と遺跡」

会下和宏先生（島根大学総合博物館教授）



今回の講座では、島根大学総合博物館教授の会下和宏先生が、縄文時代から弥生時代における景観と遺跡とのかかわりについてお話しくださいました。

まず、時代を追って遺跡の分布についてご説明いただきました。

狩猟採集を生業の基本としていた旧石器時代から縄文時代は、資源となる食物を獲得するうえで有利な場所に生活していたと考えられます。約11,700年前以降、現在まで続く「完新世」と呼ばれる時代に入ります。温暖化によって海面が上昇し、内陸に海が入り込む「縄文海進」が起き、古宍道川、古中海川（仮称）に海水が流入しました。旧石器時代～縄文草創期の遺跡分布としては、現在の橋南や玉湯町に多く、花仙山などの瑪瑙（玉髓）の産出地に近いそうです。現在はわからなくなりましたが、宍道湖内にも存在し

ていた可能性があります。縄文早期には、遺跡も水辺を中心としてあちこちに分散して分布するようになりました。

縄文前期には、相対的には海面上昇が頭打ちとなり、ほぼ停滞します。斐伊川や神戸川による堆積活動により砂洲が形成され、古宍道湖・古

中海が形成されました。このころになると、宍道湖・中海側が過ごしやすいためか遺跡は宍道湖の東岸、中海南西岸、中海北岸などで増加します。その後縄文中期になると、島根半島の日本海側にも遺跡が散見されるようになります。

島根大学構内遺跡・西川津遺跡・佐太講武貝塚などは山地（照葉樹林）、丘陵（コナラ林など）・汽水域・河川等、多様な環境を包摂する「遷移帯」に立地しており、縄文人の多角的な生業戦略が見て取れます。そのほか、西川津遺跡や佐太講武貝塚ではサザエ・アワビ・クロダイなども出土しており、島根半島日本海側、美保関などの外海もテリトリーになっていたことがわかります。こうした生業に役立てたと思われる、丸木舟や櫂、ヤス柄、ヤス、石錘などが出土しています。

また、縄文後期中葉に起きた三瓶山噴火時の火砕流による堆積物が、神戸川を經由して平野部に供給されたことにより、出雲平野が拡大しました。これにより、出雲平野中央部に矢野遺跡や吉丁田遺跡などの縄文後期の遺跡が出現しました。その後、出雲平野の微高地に環濠集落を含む11～13群程度のまとまりが形成されます。縄文晩期には松江の橋南地区で遺跡が増加します。

その後、縄文晩期頃になると、遠浅だった入江は海面が低下し、河川の沖積（ちゅうせき）（流水が運んだ土砂などが沈んで積み重なる）作用によって低湿地化し、砂洲が形成されました。その後は弥生前期になって水田として利用されるようになります。縄文期に比べて食物が安定して入手できるようになることから、定住する傾向となり、人口も増加します。そのため、弥生前期から中期にかけて出雲平野の中央部、伯太川流域などで遺跡が増加し、弥生後期にはそれが各地へと広がります。大小の平野ごとに地域的なまとまりが形成され、特に松江市八雲町、飯梨川左岸等で遺跡が増加しました。

次に、流通活動と遺跡の立地との関係をお話しされました。遺跡からの出土品を見ると、当時どのような地域間交流が行われていたかを知ることができます。例えば、縄文～弥生時代には隠岐島産黒曜石の流通から本土と隠岐島との水運の様子を、三次に起源があるとされる「塩町式土器」の分布により、沿岸部と中国山地との交流をうかがうことができます。

また、弥生時代中期後葉以降は朝鮮半島南東部から船で日本海ルートをとって鉄器が流通し、弥生後期は時期ごとに流通量が倍増するよう

になります。弥生中期後葉の出雲地域における遺跡には、朝鮮半島や中国大陸からの搬入品や、その影響を受けたと思われる文物が多数出土しています。弥生時代中期～後期頃を見ると、大陸の楽浪郡の影響を受けたと思われる遺物は、田和山遺跡や鹿島町沖、出雲市の山持遺跡などにみられます。このように、弥生時代以降人口が増加し、モノの流通量が増大することにより、河川の河口部やラグーンなどが天然の良港として重要になってきました。

最後に、眺望と遺跡の立地との関係について説明されました。例えば、朝日山は堀部第 1 遺跡から望むと綺麗な円錐形に見え、「カムナビ山（神のいますあたり）」として崇められていたと想像されます。ほかにも、仏教山と西谷墳墓群や、仏教山と荒神谷遺跡、茶臼山と田和山遺跡などの関係も、山に対する信仰（穀霊・水霊・祖霊など）を意味した立地ではないかと考えられています。

「なぜそこに遺跡が立地するか？」について地質学的な変遷と絡め、生業・流通・眺望という 3 つの視点から分かり易くご紹介をいただきました。